

大水の思い出

相坂 唯 埼玉県川口市 三十歳

祖父母の家には立派な庭があります。梅、桜、小檜の木。それを見上げるように、咲き誇る四季折々の花たち。私が幼い頃は庭でかくれんぼをしたり、水やりを手伝ったりと、祖父母と遊ぶ格好の場でした。

二〇一一年の夏。私は高校生で夏休み中でした。この年に大変なことが起こります。「大水で、床下浸水だって」

父が言いました。新潟と福島で豪雨があり、私の祖父母の家も被害を受けたのです。道路を車が走れるくらい水が引いてから、私と両親は復旧作業のお手伝いに行きました。

一面、灰色の泥。べったりと重たいそれは、庭中を覆っていました。深い緑の苔も、鮮やかな花も、いつも爽やかな低木たちも、全て。汚れてしまった庭は、哀しい色に染まっていました。点々と立つ梅、桜、小檜。幹の下の方に泥がついています。

冬になり、白い雪が庭を覆いました。そして命が芽吹く春、私は祖父母の家を再び訪れます。着いた瞬間、はっとしました。木々の葉が、見たことのないくらい色濃いのです。私はただただ眺めました。灰色の庭は、もうどこにもありません。それどころか、木々や花々は生命力に溢れて、今までで一番美しく輝いています。「大水が、栄養を運んでくれたんだろう」玄関から出てきた祖父が言いました。だからあの災害も悪いことだけじゃなかった、とも。

柔らかな風に揺れる葉の音を聞きながら、私たちはその美しさを囁み締めました。